

# 作家の肖像

第 18 回

このコーナーでは、  
毎回一人の作家を取り上げ、  
美術評論家の酒井忠康先生に、  
お話をうかがいます。



## 若林 奮

1936-2003

わかばやし・いさむ  
1936年東京都生まれ。彫刻家。東京藝術大学美術学部彫刻学科卒業。73年、文化庁芸術家在外研修員として約1年間渡欧。80年、86年のベネチア・ビエンナーレに出品。96年中原悌二郎賞受賞。武蔵野美術大学教授、多摩美術大学教授を歴任。主に鉄や銅、鉛などの金属素材を使い、深い自然観に基づく思索的な作品を制作した。67歳で死去。

### 思慮深い観察者

猛烈な雨が降ると、雨粒は下から上に上がっていくんだ――。

かつて若林さんが私に話してくれた、印象的な言葉です。あらゆる対象を注意深く見つめ、究極まで突き詰めていく若林さんの目には、大雨がそのように映ったのでしょうか。

若林さんは、思慮深い観察者でした。動植物をはじめ、さまざまな物質や空間、自然現象など、あらゆる対象を絶えず観察し、それらに対する深い省察や思索を、彫刻という形で提示しました。

若かった頃、若林さんのアトリエを訪ねる機会が何度かありました。ある日私が伺うと、アトリエの天井に振り子のようなものが吊るされていました。それは、丸めた新聞紙に、糸を取り付けたもの。若林さんは、その振り子に犬が飛びつく様子を、一日中眺めていました。動物が「跳ぶ」という動作の構造を、ずっと観察していたのでしょうかね。

### 人と自然の関係を問う

ヘンリー・デイヴィッド・ソロー<sup>(※1)</sup>は、森の中で自給自足の生活を送り、五感すべてを使って野生を知り尽くそうとした人物です。私は最近、若林さんも、ソローと似た感性を持っていたのではないかと思うのです。

若林さんは、自然に対する強い畏敬の念をもっていました。「自分が自然の一部であることを確実に知りたい」という言葉からも、人と自然の関係に対する強い関心があったことが窺えます。

「雰囲気」は、犬と人の関係を表現した作品です。両者の関わり方と

いうのは実に多様で、犬と人の視点で見える景色は異なる。両者の中間にある空間こそ、若林さんが彫刻で表現したかった部分です。

本来、人も自然界の一部であるはずなのに、文明の進歩とともに、いつからか分岐してしまった。だからこそ、若林さんは自分の方から自然に歩み寄ろうとしたのではないのでしょうか。若林さんにとって、犬は自然界を代表する一つの象徴。犬の視点に立って、犬になったふりをする事で、自然と人との距離感を確かめようとしたのでしょうか。

### 想像を遊ばせる作品

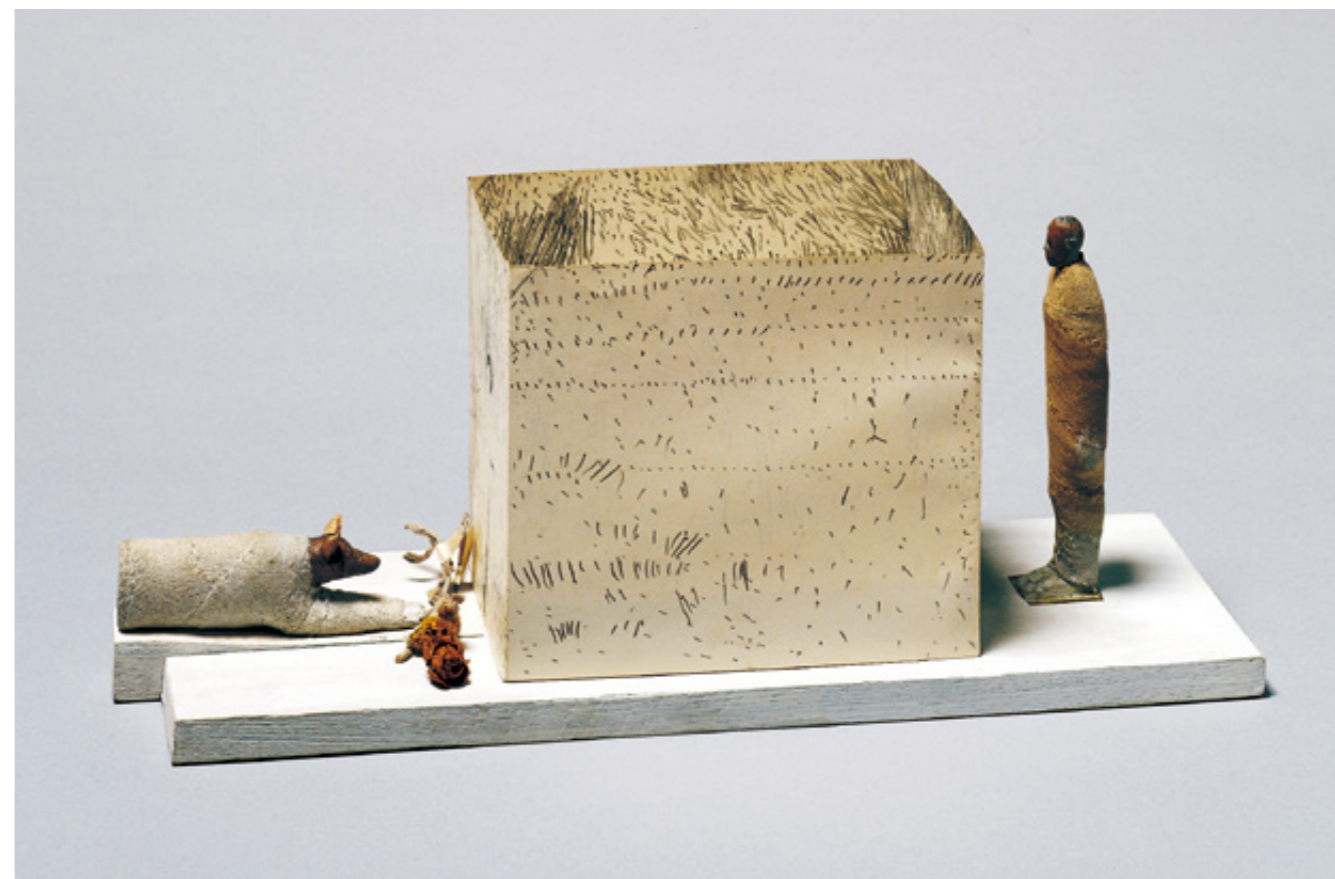
主に鉄を素材とする若林さんの作品は、非情緒的で、丁寧に説明はしてくれません。でも、若林さんの膨大な思索に触れるための「補助線」は引かれています。鑑賞者は、その補助線を頼りに、いろいろな想像を巡らせるよう誘われるのです。

作品は難解に見えるかもしれませんが、会って話すと、非常に楽しい方でした。若林さんは生前、二人の娘さんのために、木製の玩具を作っていました。父として、プライベートで制作したのですが、それらもやはり、楽しい想像を掻き立てる作品なのです。(談)

※1 ヘンリー・デイヴィッド・ソロー(1817-1862)  
アメリカの詩人、作家、思想家。  
ナチュラリストの先駆者として知られ、  
人間と自然の関係をテーマにした著書を残した。

### 酒井 忠康

さかい・ただやす  
世田谷美術館館長、美術評論家。  
1941年北海道生まれ。慶應義塾大学卒業。  
神奈川県立近代美術館館長を経て現職。  
光村図書中学校『美術』代表著者。



上/「雰囲気」

紙、木、インク、ジェッソ、布、バラ、ハハコグサ  
16.6×41.6×14.7cm 1980~2000 WAKABAYASHI STUDIO蔵  
両端に犬と自分が置かれている。その両者の中間にある立方体の空間が、自然と人間の関係をあらわしているときれる。  
(撮影:山本 糾 画像提供:神奈川県立近代美術館)



左下/「オズ・4人」

鉄、ハンダ、ボルト、木、グワッシュ、ジェッソ  
高さ約30~40cm 1990年ほか WAKABAYASHI STUDIO蔵  
童話「オズの魔法使い」を題材にした立体の玩具。  
二人の娘のために、プライベートで制作した。  
(撮影:上野則宏 画像提供:(株)キュレイターズ)



右下/「残り元素I」

鉄 87(台座:58)×36×86cm 1965年  
神奈川県立近代美術館蔵  
1965年の二科展に出品された初期の代表作の一つ。  
鉄を素材とする彫刻作品を多く残したが、  
鉄の扱いは時代とともに変化していった。